

昭和三十三年三月五日 印刷
昭和三十三年三月十日 発行
昭和三十七年九月一日 三版発行

文法詳説
要語精解

大鏡通釈

定価 四八〇円

著者 橘 純 一
慶 野 正 次

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行者 前 田 武

東京都千代田区神田多町二ノ七
印刷者 山 岡 景 恭

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
発行所 合名会社 武蔵野書院

電話 東京 四八五九番
振替口座 東京 六七一四六番

この本を読まれる人のために

一、この本は、「大鏡」のなかから重要な章段三十九章を選び、これに詳細な解説を加えたものである。

二、普通の注釈書は、本文のすぐつぎに注釈をおくため、学習者は、本文を自分で一応考えようとせず、すぐ注釈に目を移す傾向がある。そのため、注釈をはなれて本文を味読したり、通読のうちに大意をつかむという練習に熟していない。そういうわけで、かんじんの問題文を誤読・曲解して、思わぬ失敗を招く場合が少なくない。

三、こういう欠点をすくうためには、本文と注釈とを切りはなした参考書も必要であると痛感したので、この本は、はじめに「本文編」において本文全文をかかげ、最後に「詳解編」において、学習者自身に、みずから本文を味読し、大意をつかむ練習の機会を得させるようくふうした。

四、本文編には、要語に脚注を施し、詳解編を見ないでも、通読のうちに大意が了解できるようにし、各章の終りに「研究」問題を設けて、一章の要所・要語の再確認に役だつように配慮した。

五、詳解編は、各章とも、一〔解説〕・二〔語釈・文法〕・三〔通釈〕・四〔研究問題解説〕の四部から成り、本文編と詳解編とがすぐ対照できるように、詳解編の各所に本文編の毎ページ数を記入した。

六、詳解編の〔通釈〕文右側の日本数字は、同編〔語釈・文法〕欄の算用数字の番号を示すもので、どちらからも対照できる便宜をはかったものである。

七、通釈文中の（ ）内の文句は、原文にはない補意の部分である。多くの文や句が連続して文章をつくるが、

その文句を適切に結びつけるためには、しぜん補意の部分が必要となる。自分の能力で適当な補意を見いだすということは、古文解釈のコツといってもよいであろう。学習にあたって、この点にも注意していただきたい。

八、巻末の索引は、一「本文脚注索引」・二「本文文法索引」・三「語釈文法索引」の三部から成り、この本の特色の一部をなすものであるから、常時活用して、学習の効果を十二分に發揮していただきたい。すなわち、索引「一」にない語句は「二」、それにもないものは「三」というふうに、労をいとわずに引いていただければ、求める語句は容易に引きあてられると信じます。

昭和三十三年二月

著者しるす

大鏡概説

1 著 者

諸説があるが、まだ決定説は出ていない。古くは、①藤原為業説（本朝書籍目録・尊卑分脉等二見エル説）が有力であったが、これは、古く「世継」とよばれた「栄花物語」を「大鏡」と混同した説であるから問題にはならない。明治以後では、②藤原能信説（萩野由之・西岡虎之助氏ノ説）が提出されたが、「能信」は道長の子で、後冷泉天皇の治暦元年（1065）に七十一で死んだ人だから、つぎに述べる「大鏡」の推定成立年代にかなわない。（次章「2 成立年代」及び「詳解編」三〇ページ13参照）。

その他、③源道方説（井上通泰氏ノ説）・④源経信説（関根正直氏ノ説）・⑤源俊明説（山岸徳平氏ノ説）・⑥中院雅定説（平田俊春氏ノ説）・⑦藤原資国説（梅原隆章氏ノ説）などがあるが、今のところ、いずれも仮説の域を出ないようである。

2 成 立 年 代

「大鏡」の内容は、後一条天皇の万寿二年（1195）五月ごろを現在として語っており、「本文編」脚注一九ページ「二・二ページ」「五・二ページ」「二」参照）、登場人物の官職や称号などもほとんど（「詳解編」三六ページ9参照）矛盾していないため、伴信友（随筆「比古婆衣」二見エル）をはじめ、「大鏡」の成立年代を万寿二年とみるのが、江

戸時代からの通説であり、昭和になってからも、西岡虎之助氏は、精密な考証の上に立って万寿二年説を強く主張されたが、一方、これに対し、山岸徳平氏（岩波・日本文学・大鏡概説）や平田俊春氏（平安時代の研究）・次田潤氏（国文学史新講）らの強力な反論も出て、結局、「大鏡」の記事にもとづいて、平安朝末期、白河天皇以後の著作とする萩野・藤岡両博士の所説（国文学全史・平安朝篇）が、今のところは定説となっており、この推定は穩当のようである。すくなくとも、「世継」が禎子内親王の将来を予言し、院号（陽明門院）宣下を暗示した記事（本文編「三篇ページ」「三」章・「詳解編」二〇ページ13参照）によって、「大鏡」の成立を後三条天皇の治暦五年（延久元年—一〇九〇）以後と見ることに誤りはないであろう。

3 内 容

大鏡は、文徳天皇の嘉祥三年（八五〇）から、後一条天皇の万寿二年（一〇三三）まで、天皇十四代、摂政・関白・大臣二十人の百七十六年間にわたる皇室を中心とする貴族の歴史に関する物語（スナワチ、芳賀矢一博士ニヨッテ「歴史物語」ト名ツケラレタモノ）で、内容は、帝紀（天皇紀—天皇ノ略伝）・列伝（藤原冬嗣カラ道長マデ二十人ノ撰関大臣ノ略伝）・昔物語（逸話・雜録等ノ集成）の三部から成り、雲林院の菩提講で出あった二人の老翁と生侍とが、たがいに過去を語りあったという戯曲的叙述形式をとっている（本文「序」参照）ため、その文体は、栄花物語にくらべて、はるかに立体的であり、文学的であるといえる。

また大鏡は、栄花物語と同様、道長の栄花の生活を中心に描いた仮名文歴史物語であるが、「栄花」が編年体（年月ノ順ニ事件ヲシルス一体）なのに対し、「大鏡」が紀伝体（「本紀・列伝体」ノ略デ、天皇以下、各個人ノ伝記ヲ列記

スル一体)によつてゐる点で、この種の物語としては最古のものといえる。(内容の詳細は次章参照)

4 この本の本文採録について

④大鏡は、栄花物語のように、藤原氏に対して批判を超越して、単に史実を排列したり修飾したものではなく、道長はじめ当時の有力な人人や名家について、その人間的ないし社会的な面影を浮き彫りに描き出そうというのが、作者の意図であつたように思われる。だから読者は、大鏡に語られている事実の一つ一つを史実として信用するには及ばない。のみならず、それはかえつて危険でさえあるかもしれない。で、この抄本に大鏡章段を抄出するには、史実味の厚薄ということは度外において、もっぱら平安朝文芸の背景なり温床であつた当時の貴族社会一般の、生活情況なり生活気分に関する事項をとる事にしたのである。これは広く平安朝古典を理解する素地をつくるのに役だつと思つたからである。

⑤大鏡の特色としておもしろい点は、貴族社会の生活を語りながら、その語り手(世継ヤ侍^{ヨツゼヤサマ})の口をとおして、これら貴族生活に対する批判をしており、その批判の標準が、庶民的な一般社会道德のうえにおかれてゐるらしいことである。こういう庶民的な批判が、平安朝文学のうえにあらわれたのは、今昔物語^{コノシヤブ}あたりからであるが、その点で、大鏡はよほど今昔物語に時代的接近を思わせるものがある。それに、大鏡の話のなかには、意外に説話的要素が多い。その点からも、庶民的なものがこの作品の底を流れてゐるよう感じられる。この抄本十七章(兵衛^{レイゼイ}ジ)に見える花山上皇に関する話、ことに、冷泉上皇の近火ご避難のよりのユーモアに富んだ話などは、皇室に対する一般庶民の遠慮のない親近感が流露してゐて、まことに気持よく読まれる。こういう話は事実でな

いとしても、いや、事実でないならばいっそう皇室に対する一般庶民の感情を如実にあらわしていると思う。これを明治以後の対皇室感情から推して、不敬もまたはなはだしいなどと考えたりするのは、およそ見当がいがいい見かただと思ふ。編者はこういう話を、庶民の対皇室感情のよい方面のあらわれとしてこの抄本に採録した。要するに、あまり固くならず、自由な気持で、興味深い章段を採ったつもりである。

②大鏡は、その序に、道長の前例のない栄華のさま、また、その由来する所を明らかにすることを目的として語り出した旨宣言してある。この宣言からすると、著者が最も力を入れているのは、道長伝と考えてよいはずである。なるほど道長伝は、量的に見れば、他の諸大臣の伝にくらべて最も大きいのであるが、その半分は、遠く鎌足、不比等からはじめ、藤原氏の大臣についての略歴や母方の親類関係を述べたり、それぞれの造寺の功德を語ったりしたもので、直接道長には関せぬことであり、大鏡全体の組織としても、前の諸大臣列伝の繰り返しのようで混雑の感がある。他の半分道長に関する話でも、あまり重要な意味を持った話は少く、多くは道長の性行を説話化して表現した断片的小話の配列に過ぎない。思うに、道長の政治的策動の著しいものは、敦明東宮、伊周一家に対する圧迫である。これらについては、既に師尹伝や道隆伝にその始末は述べてしまつて、道長伝を語るだんになると、今さら繰り返すわけにもゆかず、従つて材料の不足を感じ、他の資料を積みこんで、量的方面で道長伝らしい体面を保たせたのではないかと疑われてくる。このように、道長伝の大鏡全体に対する量的比重は重いかかわらず、そのじつ、質的には骨抜き之感があるというのが編者の觀察である。この抄本に、道長伝の中から採択した部分が比較的少ないのもこのゆえである。これは、大鏡といえば、道長伝が最も重要な部分であると、公式的に思い込んでゐる人のために、ひとこと弁じておく次第である。

㊦大鏡は、列伝体の記述法をとったとはいふものの、一家系を単位としての列伝であるために、一個人に関する事実を中心に列伝体抄本としての体裁を整えようすると、どうしても原本の排列順をくずしたくなることがある。編者はこの誘惑にまけて、排列順をかえた部分が一、二ある。たとえば、公任カキトモに関する逸話は、この抄本では「二二、四条大納言公任」としてあって、兼家カキイモ伝抄録ののち、道隆伝の前に位置させてあるのなどがそれである。元来この記事は、頼忠ヨシタカ伝のなから抜いたのであって、大鏡原本では、二十大臣列伝中十番目に出ているのであるが、公任の事だけとり放して一章にすると、公任の生存年代から考えて、そのまま旧位置におくのもおかしく感じられるからである。そのほか、済時サトキ大將の「中の君」ナカノミコがのちに零落して、御堂ミドウに独居している道長のもとに、夜中直訴したという話は、師尹伝中、敦明東宮ご退位の話をはさんで二分されているのを、一つに合わせて抄録したような所もあるが、大鏡を抄本としてまとめるためには、こういうさかしらもまたやむを得ぬことと、おゆるしをいただきたい。但し、文章語句のうえに私意を加えた所はない。

5 諸 本

大鏡の諸本には、古本系統の三卷本と、八巻の流布本と、その中間に位する六巻本とがあるが、この抄本にのった本文は、流布八巻本により、桂宮本・尾州家本・千葉本等によって校合したものである。本文中「」で囲んだ部分は、古本系にない文、又は後人の傍書の錯入したと思われるものである。

6 注 釈 書

大鏡には、よい注釈書がすくないが、明治以前では、大石千引チキの「大鏡短観抄」が最もすぐれており、明治以後では、落合直文・小中村義象共著「大鏡詳解」・佐藤球「大鏡詳解」・関根正直「大鏡新註」・橘純二「原文対照大鏡新講」などがおもなものである。

昭和三十三年二月

著者しるす

本

文

編

ことゝ給ふと云ふ所と云く一たまたま
 筑紫人きやうしだん申ふるを
 例乃て武十人のふりて乃ちた
 つとて申ふれりてなりし
 けの東國乃ちのふりて此國をいふ
 らむとやなりしまんこをききし
 筑紫よいかねて用さるゝ人武人

一、序（抄）

先つころ、雲林院の菩提講に詣^{まう}て侍りしかば、例の人よりはこよな^三う年^{せい}老^{ろう}い、うたてげなる翁^{おきな}二人、軀^{おふな}と来^きあひて、同^{どう}じ所^{しよ}にゐぬ^六めり。あはれに同じやうなる者のさまかなと見侍りしに、これらうち笑ひ、見交^{みか}していふやう、^{世継}「年^{とし}ごろ、昔^{むかし}の人に對^{たい}面^{めん}して、いかで世の中の見聞^{けん}く事^{こと}どもを聞^きえ合^あはせん。このただ今^{いま}の入道^{だう}殿^{でん}下^げの御有^ご様^{やう}をも申^{まう}し合^あはせばやと思^{おも}ひしに、あはれにうれしくもあひ申^{まう}したるかな。今ぞ心安くよみちもまかるべき。おぼしき事言^{こと}はぬは、げにぞ腹^{はら}ふくるる心ちしける。かかればこそ、昔^{むかし}の人は物いはまほしくなれば、穴^{あな}を掘^ほりては言^{こと}ひ入^いれ侍^{さむ}りけめ、と覺^さえ侍^{さむ}る。かへすがへすうれしく對^{たい}面^{めん}したるかな。さてもうつつにかなり給^{たま}ひぬる」といへば、いま一人の翁^{おきな}、^{繁樹}「いくつといふことは更に覺^さえ侍^{さむ}らず。ただしおのれは、故^こ太政^{だいてい}の大^お臣^{とん}貞^{さだ}信^{のぶ}公^{こう}の藏^{くらうど}人の少^{せう}将^{しやう}

一 京都の紫野にあった寺。もと淳和天皇の離宮。のち仁明（ニンミョウ）天皇の皇子常康（ツネヤス）親王が住された。
二 悟りを開くため、法華經（ホケキョウ）を講説する法會。雲林院の菩提講は、毎年五月に行なわれる。それゆゑ大鏡は、後一條帝の万壽（マンジュニ）二年（西暦一〇三三）五月を現在としてゐる。されしていることになる。

三 段ちがいに・格別に。

四 変な様子の・異様な感じのする。

五 「同じ」はシク活形容詞の語幹。連体形「同じき」という所に語幹を用いる慣用がある。連体詞とみてよからう。

六 「めり」は元來は推量の助動詞だが、この時代の言葉づかいでは、断定してよい所にも、わざと「めり」を用いて表現を柔らげる事が多い。こゝもその例。

七 「おぼし」は万葉集に見える「おほほし」のつづまった語で、心中に積りたまっている意。

八 藤原忠平（タダヒラ）のおくり名。太政大臣には、その死後「何何公」という名を贈るのが例。

九 近衛（コノエ）少将で、藏人を兼任しているのをいう。忠平がこの職にあったのは、宇多帝の寛平（カンビョウ）五、六年（西暦九三三）ごろ。

と申ししをりの小舎人童大丸ぞかし。ぬしはその御時の母後の宮の御方の召し使ひ、高名の大宅の世継とぞいひ侍りしかしな。さればぬしの御年は、おのれにはこよなうまさり給ふらんかし。みづからは小童にてありし時、ぬしは二十五六ばかりの男にてこそけいませしか」といふれば、世継、「しかしか、さ侍りし事なり。さてもぬしの御名は如何にぞや」といふめれば、「故太政大臣殿にて、元服つかうまつりし時、『きんちが姓は何ぞ』とおほせられしかば、『夏山となん申す』と申ししを、やがて繁樹となんつけさせ給へりし」などいふに、いとあさましくなりぬ。

誰れも少しよろしきものどもは、見おこせ、居寄りなどしけり。年二十ばかりなる生侍めきたる者の、せちに近く寄りて、「いで、いと興ある事いふ老者達よな。更にこそ信せられね」といへば、翁二人、見交してあざわらふ。繁樹と名のるが方ざまに見やりて、「ぬしは幾つといふ事覚えずといふめり。この翁どもは覚え給ふや」と問へば、「更にもあらず、一百五十歳にぞ今年はなり侍りぬる。されば繁樹は百四十には及び

- 一 近衛の中・少将などが召しつれる少年。
- 二 ここは二人称代名詞として使われた体言。「あなた」の意。
- 三 宇多天皇の御代。
- 四 宇多天皇の母后で、光孝天皇の后だった班子(ハンシ)女王のこと。
- 五 有名な。
- 六 私。
- 七 「童」とは、髪を結びあげず、放してある少年少女をいう。
- 八 童形を改め、結髪して冠をつけ、成人の服を着、実名をつける式。いわば成人式である。
- 九 对称代名詞。この時代では、めしたに使うのが例。お前・なんじ。
- 一〇 そのまま。又は、すぐの意の副詞。ここは前者の例。夏山という姓を、そのまま縁語として、繁樹と名づけた。
- 一一 「あさまし」は、あきれかえるような状態をいう。
- 一二 相当な身分の者。「よろし」は「よし」よりは程度が低く、標準並みなのをいう。ここは、いやしい者を中心とする集りだから、なかではまあ良いの意。
- 一三 「生」は「なまめく」、「なまめか」の語根の「なま」。ここは接頭語。出身のよさそうな侍。「侍」は、貴人の従者。のち、武士のみを指す語となった。
- 一四 いや、どうも。
- 一五 とても・でんで。
- 一六 いうまでもありません。

一、序

『姓は何とかいふ』と問ひ侍りければ、『夏山』とは申しける。さて十三に

てさぶらふらめど、やさしく申すなり。おのれは水尾の帝のおりおはし
ます年の正月の望の日生れて侍りしかば、十三代にあひ奉りて侍るなり。
けしうはさぶらはぬ年なりな。まことと人人おぼさじ。されど、父がな
ま学生に使はれ奉りて、下臈なれども都ほとりといふ事侍れば、目を見
たまへて、産衣に書き置きて侍りける、いまだ侍り。丙申の年に侍り」
といふも、げにと聞ゆ。

今ひとりに、「なほも翁の年こそ聞かまほしけれ。生れけん年は知り

たりや。それにていと易く数へてん」といふめれば、これはまことの

親にもそひ侍らず、こと人のもとに養はれて、十二三までぞ添ひて侍り

しかば、はかばかしくも申さず。ただ『我は子生むわざも知らざりしに

主の御使ひに市へまかりしに、又私にも銭十貫を持ちて侍りけるに、

くげもなき児を抱きたる女の、『これ人に放たんとなん思ふ。子を十人

まで生みて、これはし、十人の子にて、いとど五月にさへ生れてむつか

しきなり』と言ひ侍りければ、この持たる銭にかへて来にしなり』と。

『姓は何とかいふ』と問ひ侍りければ、『夏山』とは申しける。さて十三に

一 謙遜(ソン)して。

二 私・私自身。

三 清和天皇。その御退位は、貞観(ジ

ウガン)十八年(西暦八七六)。

四 満月の日。太陰暦では毎月の十五日

前後。

五 清和、陽成(ゼイ)、光孝、宇多、醍

醐(ダイゴ)、朱雀(スザク)、村上、冷

泉(ゼイ)、田融、花山、一条、三条、後

一条。

七 悪くも。

七 式部省の管下にあった大学寮の学

生。当時のコトワザであろう。帝都の人

は、身分のいやしい者でも自然文化的で

知識に富むという意。

九 清和天皇の貞観十八年(八七六)。

二 養父が。

二 「にくげ」は、みつももない。それ

を打消したから、ちよつとかわいいうぐら

いの氣持。

三 「これ」は、ちごを指す。「し」は

強めの助詞。

三 源為憲(タメノリ)田融帝ごろの

人)の世俗諺文(セゾクゲンブン)に、

五月の子は、親を害する由が見える。元

来は、中国の思想であるが、平安時代に

は、日本でも、そうした事が一般に信じ

られたのであろう。

四 きみが悪いのです。

てぞ、^一おほき大殿には参り侍りし」などいひて、^二さてもうれしく対面

したるかな。仏の御験な^三ンめり。年ごろここかしこの説教とののしれど、

何かはとて参り侍らず。かしこく思ひ立ちて参り侍りにけるがうれしき

事」とて、^四「そこにおはするは、そのをりの女人にや見えますらん」と

いふめれば、繁樹がいらへ、^五「いで、さも侍らず。それは早ううせ侍り

にしかば、これはそののち相添ひて侍るわらはべなり。さて閣下はいか

に」と言ふめれば、世継がいらへ、^六「それは侍りし時のなり。けふもも

ろともに参らんと出で立ち侍りつれど、^七わらはやみをして、^八あたり日

侍りつれば、くちをしようも、え参り侍らずなりぬ」など、^九あはれにいひ

語らひて泣くめれど、涙落つとも見えす。

かくて講師待つほどに、われも人も久しうつれづれなるに、この翁ど

ものいふやう、^{一〇}「いで、さうざうしきに、いざ給へ。昔物語してこのおは

さふ人人に、さはいにしへの世はかくこそはありけれと聞かせ奉らん」

といふめれば、いま一人、^{一一}「しかし、いと興ある事なり。いでおぼえ

給へ。時ときさるべき事のさしいらへ、繁樹もうちおぼえ侍らんかし」

一 太政大臣をいう。

二 大さわぎする・大評判する。

三 下に「あらん」などを略した言いかた。なたいした事があるものかと否定した反語。

四 御婦人。ここでは、奥様の意に用いてある。

五 いちやがいいます。人からの質問を否定する時の慣用句。

六 妻、娘など、自分に取って親しい女性の事を、卑下して「わらはべ」(子供)という事がある。ここもその例。

七 あなた様。相手を敬っている。

八 「ありし時」(前ノ意)のていねい語。これは以前の妻です。

九 今のマラリヤ熱。

一〇 マラリヤの発熱日にあたる日。

一一 しんみりと。

一二 法華経を講説する法師。

一三 「さうざうし」は、ものたらなくてさびしいの意。ここでは手もちぶさたで、ものさびしいのをいう。

一四 さあ、どうです。人を軽くうながす時の慣用句。

一五 「おぼゆ」は、元来は「い」という氣がする。「ふ」と思ひ出すの意であるが、転じて、ここでは「話す」意に用いた。

といひて、言はん言はんと思ひたる気色ども、いつしかと聞かまほしく、奥ゆかしきこちするに、そこらの人多かりしかど、物はかばかしき聞きわき、耳とどむるもあらめど、人目にあらはれては、この侍ぞよく聞かんとあどうつめりし。

5

世継がいふやう、「世はいかに興あるものぞや。さりととも、翁こそ少

の事はおぼえ侍らめ。昔さかしき帝の御政のをりは、国の中に年老い

たる翁嫗やあると召し尋ねて、いにしへの掟の有様を問はせ給ひてこそ

は、奏する事を聞し召し合はせて、世の政は行はしめ給ひけれ。されば

老いたる身は、いとかしこきものに侍り。若き人たち、なあなづり給ひ

そ」とて、黒柿の骨の九つあるに、黄なる紙張りたる扇をさしかくし

て、気色だち笑ふほども、さすがにをかし。

世継二

「まめやかに、世継が申さんと思ふ事は、異ごとかは。ただ今の入道

殿下の御有様の、世にすぐれておはします事を、道俗男女の御前にて申

さんと思ふが、いと言多くなりて、あまたの帝、后、また大臣、公卿の

御上を続くべきなり。その中に、幸人におはしますこの御有様申さん

一 「ども」は複数の接尾語。繁樹と世
二 継と二人の様子が。
三 早く話せばよいのにと。
四 「ゆかし」は、この時代では、知りた
五 い、見たい、聞きたいなどの意。
六 「そこら」は数量の多大なこと。
七 はっきりと理解し、要点をつかむ。
八 あいづち。
九 幾分かの事。

ハ 御参考なさつて。

九 えらい者・尊い者。

一〇 「だつ」は体言について、これを動
詞化する接尾語。気取る・様子ありげな
ふりをする。

二 何といつても高齢者だけに優雅な所
がある。

三 まじめに。

四 外の事でもありません。「かは」は
反語の助詞。

五 「道」は仏道にはいった者。僧尼。

六 「俗」はまだ仏道にはいらなない者。

七 自然、話の範囲がひろまって。
八 中宮・皇后・皇太后・太皇太后の総
称。

九 位三位以上、官参議以上の人。